



Title	『未来共生学』創刊にあたって
Author(s)	栗本, 英世
Citation	未来共生学. 2016, 3, p. 3-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56247
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ジャーナル『未来共生学』は、大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラム（以下、未来共生プログラムと略称）の機関誌である。同プログラムは、博士課程教育リーディングプログラム「複合領域型」（多文化共生社会）のひとつとして、2012年度に大阪大学に設置された。未来共生プログラムは、「多様で異なる背景や属性を有する人々が互いを高めあい、共通の未来に向けた斬新な共生モデルを具体的に創案・実施できる知識・技能・態度・行動力を備えた実践家・研究者」である「未来共生イノベーター」を養成することを目的としている。この目的を達成するため、大阪大学の8研究科と3センターの教員、および13名の特任教員が中心となって、コースワークとリサーチワークを柱とし、海外インターンシップやフィールドラーニングを含む充実した先端的なカリキュラムが策定され、2013年度から大学院生の教育を開始している（未来共生プログラムの趣旨と目的については、本号巻頭の特集「未来共生学の構想と課題」に詳しいので、そちらを参照していただきたい）。

『未来共生学』 創刊にあたって

未来共生プログラムは形成途上にある。2013年度に博士課程の第1期生を迎えたばかりであり、課程の最初の修了者が生まれるまでこれから丸4年かかり、カリキュラムも今後一層整備され拡充していくという意味だけではない。「未来共生」とはいったいにか、「未来共生学」とはいかなる学問か、という問い自体が、未解決の課題として私たちに突きつけられているからでもある。もちろん、未来共生プログラムが構想されたさいには「未来共生」に関する明確なビジョンが存在し、大阪大学は本プログラムを企画運営するのに充分な実績とスタッフを有している。しかし、このプログラムで大学院生が身につけるべき知識や能力は、レディメイドなパッケージ

として既成の学問のなかに存在しているわけではない。また、身につけるべきものの中には、たんに知識と能力だけでなく、ものごとに対する態度や、現実に働きかける行動力も含んでいる。こうした態度や行動力は、従来の大学で教育研究の対象となってきた既成の学問の枠組みからは、はみでるものである。未来共生プログラムに関わる大阪大学の教員は、プログラムを運営しつつ「未来共生」や「未来共生学」とはいったいなにかという根源的な問いに答えること、いわば「走りながら考える」ことを要求されているのである。

未来共生プログラムの「形成途上」という特性は、このプログラムが、現実に存在する社会や文化ではなく、ちかい将来に実現されるべき、るべき社会や人間同士の関係のあり方を出発点と到達点にすえていることに由来する。社会や文化の現実態や過去に存在した様態を対象とする場合は、実証的な研究も可能であるが、いまだ存在していない、より正確には萌芽的あるいは潜在的に存在するものを正面から取り扱うことは容易ではなく、試行錯誤を重ねざるをえない。

また、未来共生という概念は、ある理想やビジョンを体現しているので、当然のことにはある種の価値判断が含まれている。つまり現在の日本社会をおおっているような、閉塞的で排他的な雰囲気をよしとせず、より開かれた、多種多様な他者を包摂していくような創造的な社会と人間同士の関係を、るべき姿として描定している。それだけでなく、そうした肯定的な価値をわがものとし、それが実現する社会の創成のために現実と積極的・主体的にかかわっていく人材を養成しようとしているのである。

これは、価値中立的な「研究のための研究」を目指す旧来の学問とはおおきく異なっている。未来共生プログラムは、日本の大学制度のなかでは、きわめて挑戦的で創成的な試みであるといえる。「形成

途上」という用語にはこうしたニュアンスがこめられている。

形成途上の本プログラムにとって、「未来共生」とは、「未来共生学」とはいったいなにかをめぐる、開かれた真摯な議論が、そしてこうした議論をおこなう場が不可欠であることはいうまでもない。ジャーナル『未来共生学』は、こうした場を提供することを期して創刊された。このジャーナルは、未来共生プログラムにかかわるすべての人びとが共有するフォーラムであるべきと考えている。教育研究の成果の発表の場であることはもちろんだが、ジャーナル自体がプログラムを発展・推進させていく動力源になってほしい。本誌の持続的な刊行をつうじて、2、3年後には、「未来共生」と「未来共生学」とはなにかという課題にかんする私たちの議論が発展し、理解が深まっていることを期待したい。また、教員だけでなく、大学院生の積極的な投稿も歓迎したい。未来共生プログラム博士課程に在籍する大学院生たちは、プログラムのいわば主役である。本誌に参加することによって、未来共生プログラムの形成にあたって主体的な役割を果たしてほしいと願っている。

本誌は当面、年1回の刊行を目指している。論考の投稿だけでなく、特集や企画などのアイデアや、本誌の内容にかんする忌憚のないご意見をお寄せくださることをお願いするだいである。

2014年3月3日

『未来共生学』編集委員会委員長
大阪大学大学院人間科学研究科

栗本 英世